

会報 安曇野教育

第46号

発行所 安曇野市教育会
発行人 藤松 伸二郎
編集 会報委員会

発行日 平成27年6月26日
題字 川田 殖

南安曇教育会百年誌を紐解いてみた。紙面の都合で大正時代と戦中・戦後時代の教育の事業を概観してみる。

【大正年代の事業抜粋】

○日本を代表する学者（務台 理作や、折口信夫など）を招聘して講習会が開催されるようになる。
（哲学、文学、唱歌、国語、植物、体操等）

○「南安曇郡誌」編纂が企画され、刊行される。

○北アルプスの地質・動植物調査が実施される。

【戦中・戦後時代の事業抜粋】

○南安曇哲学会が発足する。

○終戦直後の木村素衛先生招聘

○荻原礫山研究と美術館建設

○中学校陸上競技会・合同音楽会の開催

○南安曇教育会館の建設

これら是一部である。概観してどう感じられるだろうか。これらのスケールの大きな

事業が、行政をはじめ他者から働きかけとしてではなく、会員が主体的に構想して、教育会の事業として遂行されてきたことに頭が下がる。



熱き思い ～子ども・地域・私のために～

会長 藤松 伸二郎

教育会の目的が見事に重なっているように思える。先輩に導かれて我々の歩むべき方向が生み出されているとも言えよう。今改めて、多くの先輩方の教育会への熱き思いを感じる事ができる。その思いとは、「教師としてのありよう」である。それはまさに、

- 一、会員が心を合わせて教育精神を高める。
 - 二、会員の職能の向上に努める。
 - 三、教職員全体の職能向上に寄与する。
 - 四、郷土の教育を進展する。
 - 五、平和日本と世界文化の建設に貢献する。
- 先ほど抜粋した教育会事業と、これら

平成27年度安曇野市教育会役員・会務の分担

役職	氏名	所属	敬称略	会務分担
会長 (代表理事)	藤松 伸二郎	豊科南中		会務統括
理事	三澤 晴男	事務局		会務全般
理事	宮下 正彦	事務局		財務・会務
監事	神谷 哲彦	穂高東中		
監事	百瀬 新治	堀金中		会務全般
委員長	大島 春彦	穂高南小		庶務
副委員長	丸山 福一	穂高南小		【会誌編集委員会担当】
委員	筒井 年恵	豊科南小		【人権教育委員会担当】
委員	伊藤 和子	明南小		【図書館教育委員会担当】
委員	青木 泰治	明北小		【人物読み物委員会担当】
委員	平沢 重人	明科中		【キャリア教育委員会担当】
委員	佐藤 厚彦	豊科北中		【キャリア教育委員会担当】
幹事	窪田 尚幸	三郷小		広報 郷土文化財センター
幹事	酒井 健次	穂高東中		【郷土文化財センター運営委員会担当】
幹事	土松 丞司	穂高北小		【展覧会運営委員会担当】
幹事	松尾 修人	穂高西小		【環境教育委員会担当】
幹事	西林 友枝	三郷中		【社会科資料集編集委員会担当】
幹事	小林 さと枝	豊科北小		【生涯学習委員会担当】
事務局	宮下 正修	事務局		【木村素衛委員会担当】
事務局	川上 修之	事務局		【情報委員会担当】
議長	窪田 博千	豊科北中		広報 郷土文化財センター 【会報委員会担当】
議長	松島 千尋	豊科南中		
信濃教育会 常任委員	藤松 伸二郎	豊科南中		
信濃教育会 代議員	遠藤 正志	豊科北小		
信濃教育会 代議員	丸山 福一	穂高南小		

子どものために、地域のために、そして、教育専門家としての私自身のためにありたい、という思いである。

一年間、手を携えて精進しようではありませんか。

平成二十七年 教育会総集會開かれる



平成二十七年安曇野市教育会総集會が五月十六日(土)に開催された。より参加しやすい総集會にというこれまでの反省をもとに、昨年度と同様開始時刻を午後二時三十分とし、堀金総合体育館サブアリーナにて開催された。

雨上がりのしっとりとした空気の中で、音楽同好会と有志の先生方による『大地讃頌』の素晴らしい混声合唱で幕を開け、引き続き全員で『わか葉』を斉唱した。

藤松伸二郎会長は、挨拶の中で「公益社団法人として四年目を迎えた安曇野市教育会の目的は、会員が互いに心を合わせて教育精神を高め、会員の職能の向上に努め、教職員全体の職能の向上に寄与し、教育の刷新と充実を図り、郷土の教育を進展することである」と、まず話された。定款に基づいて組織された今年度役職員(一面)の紹介の後、「安曇野の子ども達のために参加した先生方が、教育職としての専門性を高める機会となる総集會になることを願う」と結ばれた。続いて、信濃教育会長代理萩原保儀様、安曇野市教育委員長唐木博夫様からお祝いの言葉をいただいた。

開会行事に続いて、教育会特別委員会の木村素衛委員会委員長柳川哲郎先生による研究発表と、木村素衛先生の四女でありエッセイストの張さつき先生の講演が行われた。

※五月十一日(月)の定時総会で承認された昨年度の収支決算書と本年度の予算書を四面と五面に掲載した。

会員研究発表

木村素衛先生の

人間味に触れる

素衛日記の判読に

関わって

木村素衛委員会

委員長

先生

(豊科北小学校)

木村素衛先生の日記、全四十四冊のうち三十八冊目までの判読を終え、これまでに明らかとなった信州との強いつながりや素衛先生の人間味について、日記をもとに発表された。

木村素衛委員会は八名で構成され、二人一組で日記の判読作業を行う。素衛先生の文字には癖があり、哲学的な内容やドイツ語で書かれたものも含まれているため、読み解いていくのはとても難解だと柳川先生は話された。

この日中心に発表された日記は、山川京子さんと結婚してから広島文理科大学の助教授として勤められ、三女の朝子さんが生まれたころまでのものである。

まず柳川先生は、信州の魅力に惹きこまれていく素衛先生の姿が日記の随所に表されていると話された。実際に講演で信州各地を訪れ、人々の人柄の良さに触れたり、目の前に広がる美しい景色を眺め



たりした日記が紹介された。先生が安曇野を訪れたのはこれより後



くことが私たちの使命だと思っています。」と力強い言葉で結ばれた。

会員発表を聴いて

穂高西小学校

総集會に出るまで大変失礼ながら木村素衛先生のことを全く存じ上げておりませんでした。勉強不足です。

先生に研究発表をしていただいて、素衛先生のお人柄や人生、安曇野との深い関係を学ぶことができました。毎回委員会で素衛先生の文書の判読作業に、事前に下読みを四〜六時間各自行い、お一人約五十ページも分担なさっていると聞き、大変頭が下がります。

先生の発表や張先生のご講演をお聞きし、安曇野市の教員になれたことを嬉しく思い、また胸に熱い思いが込み上げました。それは、総集會の最後に藤松会長先生がおっしゃった、「先輩の足跡に恥じない生き方をしたい。それには子どもを愛すること。同僚の先生方という学校をつくっていききたいものだ。」のお言葉でまとめたい気がします。安曇野市教育会の一員として、誇りと責任を持って子どもたちに向き合っていきたいです。

講演(概要)

信州の山々と人々を

こよなく愛した父・

木村素衛

エッセイスト

張 さつき 先生

私は、安曇野へ来て見る父の碑が大好き。「かそけくも消えゆく光・・われ死なばこの山見ゆる野の末に葬れかし」とどうして父はそういう気持ちになったのか。それは父が本当に信州を好きになつたからではないか。

父は高等学校一年のときに胸の病にかかってしまったが、病が癒え、大学で西田幾多郎先生から学ぶことができ、二九歳で卒業すると、信州出身の務台先生から講演を勧められ、最初の講演を千代村で行った。講演後、父は「千代村に咲いていたたつた一輪のすみれに心惹かれた。」と書いている。父の講演は信州のいろいろなどころに広がった。

夏期大学にも呼ばれて、信州の先生方とカントを原書で読んだが、「なぜこのような難しいものをしかも原書で読みたいのか」と父が尋ねると「教育者として下卑ないため」と答えたという。そういう信州の先生の気質が父は好きだったと思う。

京都大学に戻って「教育学」を



教えないかという話があった時、哲学や美学をもっとやりたかった父は悩み『教育学』というものが私の心の中に憂鬱の塊として蓋を閉めた」と書いている。それでも、対立するものを愛で包むことによつて乗り越えようと考え、自身的情熱と信州の先生方のひたむきな思いもあって、父は教育学をやることを決心する。

昭和十七年の秋に満州・中国へ行った父は「教育にあたる者は、常に無名戦士の墓を思うべし」という色紙を残している。戦争が終わり、父は、九月十六日には信州に来た。父は本当に信州によく来ているが、信州には父の話をききんと聞いてくださるたくさんの方の先生がいたということが大きかったと思う。

正月には、京都の自宅と一緒に祝いをしたが、一月十六日には、また信州へ出かけていった。かぜをひいていたので、母が断れないかと言ったが、父は「信州の先生だけは断れない」と言つて元気に出ていった。しかし、昭和二十一

年二月十二日に、父は講演に来ていた信州で亡くなってしまった。京都へ帰る途中、松本で泊まると、焼香に一時以上もかかるほど多くの先生が集まった。いろいろな駅には、寒い中外套も着ないで先生方が待っていた。信州の先生方と父との間の深い愛情を感じる。父はまっすぐな誠実と激しい情熱をもつた信州の先生方を通して、戦後の日本の教育を作り直そうと考え、自分の思いをぶちまけていたのではないか。

信州の先生方には、父が亡くなってからも毎年徳ぶ会を開くなど、いろいろ尽くしていただいた。私は中学まで、家が貧しいというのを何とも思わずにいたが、高等学校に入ると、まわりの友達はプレスリーだのジャズだのと楽しそうなお話を聞いていた。そういうことを知り、反抗的になった。

そんな一八歳の時、父の十三回忌で、信州に母と共に来ると、信州の先生たちが、母のことをまるで皇后様のように迎え、自分にも慈愛の目を向けてくれた。法要には、百人もの先生が集まって、父の骨を雲上殿に納めた。先生方は、父のことをいい人だった、優しくかったと言ってくれて、とてもうれしかった。その時、私は、まっすぐに生きていかなくてはいけなさと悟った。無名戦士であるようにと父が言った通りのことを信州の先生方は私にしてくださいました。信州の先生方が私を育ててくださ

た。今日、これだけは言おうと思つて来ました。「本当にいろいろありがとうございました。」

張 さつき氏の講演を

お聞きして

穂高西中学校

終始謙虚で穏やかな方でおられた。父である木村素衛先生を語りつつ、当時の信州の教師の情熱や温かさを、それこそ尊敬の念を持つて語っておられた。

引き込まれてお聞きする中、特に印象に深かったのは、木村素衛先生の本質を見る目の確かさと愛の深さだった。「この村で一番偉いのは誰だと思ふ？」と少年に問い、それは周りからはやや距離を置かれていたある人物だと教える。木村先生は、黙々と土と向き合うその姿の中にある人間の本質を、深い愛情を持って見つめておられた。はつとさせられるエピソードだった。

また、張氏ご自身が高校生の頃、当時の信州の教師達の優しき溢れるまなざしに感動されたお話も印象的だった。その愛によつてご自分の存在を自覚し、その後の生き方にまで影響を与えられたとおっしゃる氏の信州への思いが嬉しかった。信州の教育の一端を担う者として、いつまでも心に留め置きたい講演だった。

東 南 北

日本を離れて

以前、海外日本人学校に勤務する機会を与えていただきました。外国の小学校に通っていた長男の参観日及びPTAの会に参加した時のことです。教室に入り、学級PTAが始まりました。次年度の役員決め場面でした。担任の先生が「来年度の学級PTA会長及び副会長を募集します」・思わず、私と妻は担任と目が合わないように下を向いてしまいました。

ざわざわした雰囲気を感じ、顔を上げてみると周りの保護者のほとんどが手を挙げています。はありませんか。役員に立候補しなかったのはなんと日本人の私たち夫婦だけだったので。情けない気持ちでいっぱいでした。考え方、国民性の違いを痛感した瞬間でした。

役員が決定したあとさつそく役員からの提案です。「日曜日に動物園ツアーを行います。参加希望のこともと引率ボランティアの保護者を募集します」私たち夫婦は思い切り挙手しました。

様々な国民性、教育についての考え方に肌でふれ、日本人や日本の教育について見直す良い三年間となりました。

(三郷中学校長 井口真)

初任の先生方の紹介

生方を対象にして、初任者歓迎研修会が五月二十五日、南安曇教育文化会館で開かれた。

会に先立って、郷土文化財センターと視聴覚教育協会を見学し、担当の方から説明を受けた。

研修会では、まず初任者の先生方が自己紹介を行い、この二ヶ月に体験した出来事的印象を話された。そして、丸山福一常任副委員長が、「初任者の先生方には、学校を超えてつながり、ともに学び続けてほしい。」と挨拶された。続いて、信濃教育会を代表して渡邊和代教科用図書研究部長が「哲学がわからなくてもそこにいるだけで顔が変わってくる、という先輩に導かれ研究会で学ん

だ。安曇野市は木村素衛先生の碑も残り大勢の教育者を輩出した恵まれた地、大いに学んでほしい。」と挨拶され、次に唐木博夫教育委員長が「教員としての生を受け



りながら「子どもの後ろからでなく前にいて手立てを用意する」「嬉しいことや喜びは大変のあとにあつた」と話された。最後に初任者を代表し、先生(明科中)が「今後も先輩の先生方の教えをいただき、初任者全員で仲間として情報を共有し、高め合っていきたい」と決意を述べられた。

初任者歓迎研修会に参加して

穂高東中学校

その後、三人の先輩の先生方から、歓迎の言葉として自らの実践や体験から学んだこととお話いただいた。最初の先生(豊科北中)は他業種にも勤めた経験から「業界の常識は世間の非常識でもある」「わからないことをわからないままにしない、わかったふりをしない」と話された。

先生(穂高東中)は学力向上を目指しての実践から「生徒が自分自身に自信がもてるように支援することが私たちの役割」「仕事の即効性は少なくても今必要だと思えば種をまくこと」と話され、

先生(三郷小)は自らの初任からの十年を振り返

周りについて行くことが精一杯であつたという間に二ヶ月が経つという時期に初任者歓迎研修会に参加でき、学びと気づきの多い時間を過ごさせていただいたことをありがたく感じています。安曇野の先人達が築き上げてきた教育への熱い思いをひしひしと感じ、改めて教師という務めの責任の重さ、そして子どもたちの思い行動することの尊さを考える事ができました。この二ヶ月を振り返り、教師として知っていなければいけない、と生徒の前で強がり傲慢になっていたように思います。「分からないことを分かたないように言わない。」という先輩の

郷土の文化財②⑥ 信濃教育会南安曇部会編集『體操(体操)科教授細目』



大正二年に、信濃教育会南安曇部会で、編集委員長の伴野文太郎氏のもと、體操科教授細目が出版されました。この體操科教授細目が郷土文化財センターに展示されています。この中の第一編の総説には、①體操科(体育科)の目的、②體操科の教材、③體操科の教授形式、④設備、⑤諸注意が綴られています。そして、第二編には、教授週案及び遊技解説が綴られています。尋常科(小学校)の一年生から六年生まで、高等科(中学校)の一年生から三年生までの各運動領域の具体的な内容が説明されています。

また、この體操科教授細目とは別に、大正三年に作成されました「小学校體操科教材系統表」(南安曇郡教育会編集)も文化財センターに展示されています。



この百年で体育の学習内容がどのように変わってきているのか、興味関心のある方はぜひセンターにお立ち寄りください。(郷土文化財センター運営委員会)

言葉が胸に響きました。

子どもは教師の鏡。自らがまっすぐな気持ちで学び、子ども達と真剣に向き合わずして、子ども達が私と向き合ってくれるはずはないと大変反省しました。

何より茶話会でお話した先生方の言葉の端々に子どもの成長を願う温かな思いと安曇野への郷土愛がにじみ出ていて、この地で教師の任をいただいた事を嬉しく感じました。

まだまだ周りの先生方や生徒達

に助けられる毎日ですが、昨日より今日、今日より明日、一歩ずつ学び、精一杯取り組んで参ります。

編集後記

今年度最初の会報をお届けします。今度も機関紙として、教育会の活動の様子をお伝えしていきたいと思えます。